枕詞「瑞垣の」と被枕「久し」に関する一考察

横内亮太

一の一、はじめに

枕詞とされる語の中で、特に用例の少ない語がある。枕詞の特徴を被枕との固定的関係に見る場合、なぜ少ない用例から、それらの「枕詞」と被枕との関係を固定的であるとすることが出来るのか、問題となる。後述のように歌意との関わりを基にして枕詞の認定を考える論があるが、白井伊津子〔一九九三年〕が指摘するように、枕詞の認定が解釈により揺れるという側面がある。また人麻呂の枕詞は歌意との関わりが指摘されており(一)、同じ枕詞とされる語の中にも位相が指摘されている。

一回的な用法が多用され固定されるという単純で線形的な関係を念頭に置くと、枕詞と被枕との間には連想関係があると考えられる。そしてその一回的な連想関係が固定化されるためには、その連想を共有することを許す基盤が必要であると考える。固定化した枕詞と被枕との関係を形態的な側面から分類する一連の論(二)は、枕詞と被枕の続き方の全体像を知る上で貴重なものである。しかしそれと同じくらい重要なことは、個別的な検討を通して、枕詞と被枕との関係を固定化することを許す共時的な理解、即ち枕詞と被枕との文脈上の関わりを求めることである。本稿ではそのような立場から、枕詞「瑞垣の」と被枕「久し」との関係を考えたい。

一の二、「瑞垣の」の枕詞認定

「瑞垣」の例は万葉集中に三例ある。

娘子らが袖布留山の**瑞垣の〈水垣之〉**久しき時ゆ思ひき我は

（4・五〇一　柿本朝臣人麻呂歌三首　略体歌）

娘子らを袖布留山の**瑞垣の〈水垣之〉**久しき時ゆ思ひけり我は

（11・二四一五　寄物陳思　非略体歌）

瑞垣の〈楉垣〉久しき時ゆ恋すれば我が帯緩ふ朝夕ごとに

（13・三二六二　或本反歌）

この三例のうち、橋本達雄〔一九七五年〕（万葉集枕詞一覧）は三二六二歌のみを枕詞として立項している。五〇一歌や二四一五歌については「序詞の一部として、同じく「久し」にかかる例もある。」という指摘がなされている。凡例には「万葉集中の枕詞は網羅したが、筆者の見解によって除いたものもあ

る。」とあるが、枕詞「瑞垣」にどのような判断がなされたのか判然としない。橋本達雄〔二〇〇〇年〕（編著）では五〇一歌（島田裕子執筆）について、「瑞垣」を序詞としている。一方で、青木周平〔二〇〇一年〕（辞典。青木生子、橋本達雄監修）の「みづかきの（水垣）」の項（塩沢一平執筆）では万葉集の三例とも枕詞とされ、「瑞垣の」を枕詞と取るかどうかの態度には若干の揺れが見られる。また橋本達雄〔一九五七年〕において、記紀歌謡の中での序詞の成長と展開を示すという目的のもとで、その目的のためには「その定義が必ずしも厳密を要するものではなく」と断ったうえで、『万葉代匠記』精撰本「惣釈枕詞」の「序ト云モ枕詞ノ長キヲ云ヘリ」という説に従っている。橋本氏が「万葉集枕詞一覧」においてこの見方を用いたかは定かではないが、五〇一歌や二四一五歌は「袖」までが「布留」を導き、第三句までが「久しき時」を導く二重の序（『万葉集釈注』（五〇一歌注）とされるため、その中の「瑞垣」は二句以上より成る句であると認められる。その点において、契沖の序の定義に当てはまる。

句の長さという形態面ではなく、序詞と枕詞の差を機能面から論じたものとして、井手至〔一九七七年〕は、序詞は序も主想も作者と同一次元にあるが、枕詞はその伝承性、固定性において主想と別次元にあると区別する。井手氏の説から考えると、作者の次元とは別の次元にある枕詞は上からの修飾を受けないと考えられる。五〇一歌や二四一五歌は前に修飾がされているため、「枕詞一覧」では枕詞とされておらず、三二六二歌は前に修飾がないため、枕詞とされていると考えられる(11)。

井手氏の序詞と枕詞の区別において、作者と同一次元にある序詞は歌意と関わると考えられる。井手氏の論より先に、伊藤博〔一九五三年〕は、序を二つ持つ歌という類型を捉えた上で、上の方の序が歌の主意と意味の上で関係していると指摘する。その際に、五〇一歌や二四一五歌について、「袖振る」が恋の主想と関わると指摘されている。上代の「袖振る」について、鉄野昌弘〔二〇〇〇年〕は思う相手に見られることを期待する相聞的な行為であると指摘している。その一方で、伊藤氏の論の中では「瑞垣」については主想との関わりは指摘されていない。

これらのことを考え合わせると、五〇一歌や二四一五歌の「瑞垣」は、形態としては上から修飾がなされているという点で序詞として捉えられ、機能としては主想との関わりが考えられていないという点で、枕詞として捉えられる。また三二六二歌では枕詞のように「瑞垣」が使われる。

なお三二六二歌と、五〇一歌や二四一五歌との先後関係について、注釈史では揺れが見られる。現代の注釈では、『万葉集全注』（三二六二歌注、曽倉岑執筆）が三二六二歌は前半が五〇一歌や二四一五歌に類似し、後半が『遊仙窟』に影響を受けた大伴家持や田辺福麻呂の句と類似すると指摘する。そこから「新旧両方の要素を持つが、当然作歌時は新しく、知識人の歌であろう。」としている。また『万葉集釈注』（三二六二歌注）は『遊仙窟』が日本に伝わったのは文武朝晩年（七〇四～七）の頃であったから、これはそれ以降の歌であることが確実で、反歌三二六一よりさらにのちに添えられたものと考えられる。」としている。以上のように、現代の注釈では、三二六二歌に見られる『遊仙窟』等の摂取から、三二六二歌を五〇一歌や二四

一五歌よりも後の作と見ている。『新日本古典文学大系』は、「古詩十九首」にも「相去ること日（ひび）に已に遠く、衣帯日（ひび）に已に緩ぶ」（文選二十九）、その李善注に引く古楽府の「衣帯日（ひび）に緩に趨く」などがある。それらに基づくものであろう。」としている。本稿では三二六二歌の典拠の問題には踏み入れる事は出来ないが、典拠を李善注などに引かれる古楽府と考えるのならば、『万葉集全注』や『万葉集釈注』のように三二六二歌を後の作と決し切ることは難しい。そして近世の注釈、特に『古事記伝』以前の注ではその逆の流れが考えられている（後述）。ここには、本稿で問題とする枕詞「瑞垣の」と被枕「久し」との関係への解釈が関わると考える(四)。

一の三、問題の所在

さて、序と被枕との結合について、枕詞は慣習的・固定的・社会的であり、序詞はその場限りで個人的なものとされる（土橋寛〔一九六〇年〕）。それに対し「瑞垣」の場合は序詞として用いられた時も、枕詞として用いられた時も「久し」を導いている。万葉集中実辞として「瑞垣」を用いた例は無いが、「瑞垣」と「久し」との強い結びつきが予想される。しかし枕詞「瑞垣の」と被枕「久し」の繋がりには一考の余地がある。それは、「瑞垣」の語義に関する点である。

枕詞「瑞垣の」は、『時代別国語大辞典上代編』（以下『時代別』と呼称）には「神社の玉垣の久しく栄えつづく意で、久シにかかる。」と説明される。この解釈は、「長くそこにあるもの」という「神社の垣」の性質から「久し」を導いている。また枕詞ではなく実辞としての「瑞垣」の説明には、「玉垣。神社の周囲にある垣を讃めていう。」とあり、「瑞垣」を神社の垣として捉えている。それに対し「ミヅ」は「形状言。若々しく生き生きとしたさま。みずみずしいさま。事物の新しく清らかなさまや、目新しくめでたいさまを讃めていう。」とされている。ここで挙げられる美称としての「ミヅ」の性格からは、実辞としての「瑞垣」を神社の垣に限定する根拠が判然としない。現に記紀には「水垣宮」と、宮の名として「瑞垣」は用いられる。

御真木入日子印恵命、師木の**水垣宮〈水垣宮〉**に坐して、天の下を治めき。

（崇神記）

三年の秋九月に、都を磯城に遷したまふ。是を**瑞籬宮〈瑞籬宮〉**と謂ふ。

（崇神紀）

宮の名としても使うことが出来るということから考えると、「瑞垣」を神社の垣として特定することは難しい。その点において、『時代別』のような解釈には疑問が残る。

枕詞「瑞垣の」と被枕「久し」の関係についての注釈史においても、「瑞垣」を神社の垣と限定して捉えることが出来るかどうか、揺れが見られる。そこには主に二点の問題点がある。第一に、記紀に挙げられる水垣宮を解釈に含めるかという点である。第二に、三二六二歌への説明である。「瑞垣」を神社の垣ではなく素晴らしい垣一般を指すと考えたとしても、五〇一歌や二四一五歌の「布留山の瑞垣」ならば、「布留山のすばらしい垣」すなわちそこにある「石上神宮の神社の垣」を示すと捉えることが出来る。しかし三二六二歌は「瑞垣」単独で「久

し」を導いており、文脈からも神社の垣であることが分からない。それにも関わらずなぜ「瑞垣」のみで「久し」を導くのかという点が問題とされている。

『万葉集註釈』（五〇一歌注）は、

水垣トハ、神社ノ瑞籬也。神ハアマクタリ給テ、後ヒサシケレハ、ヒサシキ世ヨリト云ナリ。

とする。「瑞垣」を神社の垣一般を指すと捉えている。

『枕詞燭明抄』は、

布留のやしろは瑞籬の宮の御宇にたてられてわか国にては神社のはしめとす。よつて布留のやしろはふるき事に別してよめり。此故に久しきことをはみつかきの御代を申なり。ふるの神社の神垣を以て皇居のみつ垣の宮に相兼て、みつかきの久しき世とはよめる也。

とする。五〇一歌や二四一五歌は石上神宮が久しいことと、水垣宮が久しいこととを兼ねて「久し」を導いていると説明している。「久し」を導く神社の垣としては石上神宮の神垣に限定している。

『冠辞考』は、水垣宮が久しさの例として名高かったとし、五〇一歌について、

こは此神の宮はた久しき時に斎初められしなれば、久しきためしにいはんも理あり、又右の歌（筆者注：三二六二歌）に打まかせて、楾垣云云といひしに同し詞なるをも思ふに、これはた同し天皇のみづがきの宮を挙て、久しきためしにいふ事いとはやくより有しをもて、かりに用ゐて振山のみづがきとはいひ下しつらんとも覚ゆ、人まろの哥には、古ことをはたらきてとりたる、集中にかたぐ〳〵あれば也

とする。三二六二歌は水垣宮に寄せて「久し」を導いており、五〇一歌や二四一五歌はそれを臨時的に用いて石上神宮の瑞垣を詠んでいると考えている。

それに対し『古事記伝』（巻二十三巻水垣宮巻）は、

水垣宮、凡て水垣と云は、みづ〳〵しき垣と、美偁たる偁なるを、〔水は借字なり、書紀に瑞字を書れたるは、さらに当らぬことなるを、美豆に用ふる字なき故に、普く此瑞字を書ならへり〕宮号とせられたるなり、〔必しも此宮の御垣の、水垣なりし由の号には非ず、なほ水垣の事、師の冠辞考に委し、さて歌に、水垣の久しとつゞけよむは、此宮号につきてのことと、昔より心得来つれども、よく思ふに、然には非ず、抑如此つゞけよむことは、万葉十一に、處女等乎袖振山水垣久時由念来吾等者（筆者注：二四一五歌）、これ始なり、此歌を四巻には、人麻呂の歌とて載たれど、人麻呂よりは古く聞ゆ、此は石上振社は、いと上代よりの神社にて、其水垣は、久しき世々を経たる故に、久しの枕詞にせしなり、かくて後は、振山といはで、たゞ水垣の久しとのみもよむは、右の歌に委て、省けるなり、若此宮号に就ていはば、水垣宮のといはでは、言たらず、水垣とのみにては、宮号にはなりがたかるべし〕

とする。「瑞垣」のみでは「水垣宮」は指さないとした上で、まず二四一五歌があり、「布留山の瑞垣」が久しさを導くと考えている。そして三二六二歌は二四一五歌に委ねて、「瑞垣」だけで久しさを導いているとする。

『万葉集古義』（五〇一歌注）もまた「水垣宮」との関わりを否定する。布留の社の縁から久しを導くとした上で、

さてしからば、振山の水垣に限りていふべきに、十三に、楉垣久時従恋為者云々（筆者注：三二六二歌）とあるは、いかゞぞや思はるゝに従て、なほ熟考ふるに、彼十三なるは、柿本朝臣人麻呂歌集歌曰（筆者注：三二五三歌）とて、長歌反歌ありて、其次下に、小治田之云々の長歌又反歌（筆者注：三二六〇歌、三二六一歌）ありて、或本反歌曰楉垣云々とあれど、小治田之云々の反歌のさまならず、引混て入しものと見ゆれば、これも本は、人麻呂歌集中の歌にて、さて今の未通女等之云々の歌に次て、同時に人麻呂の作れしものならむと、昔より混乱しならむ、さてしかするときは、上は今の歌に委ね省て作るものとすべし、こは甚く強たることなるやうなれども、必しかありけむとおもはるゝなり

とする。三二六二歌については元々二四一五歌や五〇一歌の後にあったものと考え、それに委ねることで三二六二歌は「布留山の」瑞垣であることを省いているとする。

近代以降の注釈では、「水垣宮」との関わりは考えられていない。『時代別』に見られるように「ミヅ」を美称と捉え、神社の垣を指すと考えることで「久し」を導くとする宣長の解釈に収束しているように見られる(五)。

なお「久し」との続き方について、賀古明〔一九六一年〕は万葉集で「瑞垣」を持つ三例が全て「久し」を導く「恋」の歌であると指摘している。賀古氏は、「垣」に「「偲ぶ恋の場」を表わす特定意を負う語」という性格を見た上で、「布留」にある「古い」垣という属性に恋の文脈を生じる契機を見ている。この指摘は、「瑞垣」が示す、「久し」と共起する文脈の固定性を考える上で重要である。しかし三二六二歌への理解においては、瑞垣の所在地が布留であるとは読み取ることが出来ないため、必ずしも有効とは言えない。

更に、「瑞垣」の語義の問題に加え、神社の垣という物そのものの性格から「久し」を導くとする『時代別』の説にはもう一点疑問が見られる。「瑞垣」の類義語の存在に関する問題である。『和名類聚抄』には「瑞籬　日本紀私記――〔俗云美豆加岐　一云以賀岐〕」（伊勢十巻本、二十巻本）とある。ここでは「瑞垣」は「斎垣」と同一視される。また『時代別』では「玉垣」と同一視される。しかし「斎垣」も「玉垣」も枕詞や序詞として「久し」を導く例は管見には入らなかった。

このように「瑞垣」は神社の垣を指すか明確ではない部分を含むにも関わらず、神社の垣を介して「久し」を導くとされている。また神社の垣を指す他の語で「久し」を導いている例は見られない。そこから、「神社の垣」という物そのものの性格から「久し」を導くという説明が妥当なのか、疑問が生じる。その点から見れば、神社の垣を指す語の中で「瑞垣」のみが持つ、形状言「ミヅ」に「久し」を導く性格があると考える事は出来ないだろうか。

本稿ではまず、「瑞垣」により導かれる「久し」の性格を再検討したい。次に形状言「ミヅ」の分析を通して、枕詞「瑞垣の」が「久し」に結びつく理由について考察したい。

二の一、「久し」の分析のための「長し」の分析

五〇一歌や二四一五歌の「久し」は「長い」「久しい」の両

方で訳出される。五〇一歌について『口訳万葉集』には「長い間をば」とあり、『万葉集注釈』には「長の年月を」とある。それに対し他の注釈書では「久しい以前から」という訳出が大半である(六)。

『時代別』の「久し」の記述には、「久しい。時間が長い。」とある。この記述にあるように、「長し」と「久し」は一部意味が重なる。

「久し」の意義について、甲斐睦朗〔一九七七年〕には万葉集の「久し」の用法も併せて考察されている。「久し」の用法の性格を、

①「久し」は、訪ねる、会う、手紙を贈るなど、相手に対して積極的な行為が中断している時間の長さを言う。また、罹病など正常でない心身の状態の継続にも言う。

②その時間の長さは、話し手あるいは当事者の悔恨あるいは遺憾などの気持を含んだ主観的判断として表される。したがって、「久し」は、客観的に見て長い歳月であろうと、短い数分の長さであろうと、その事態に対する心象基準時間を超過していれば不都合なく用いられる。

③「久し」は願望あるいは期待に反した時間の長さを表すので、否定的文脈の中で用いられる。

とまとめている。甲斐氏は、「否定的文脈での使用」と「主観性」が「久し」の性格であると考察している。この主体性については、「弘徽殿には、久しく上の御局にも参上りたまはず。」(『源氏物語』桐壺)の例に対し、

「ヒサシ」の判断は、物語の語り手が桐壺帝の心情に即して(心情を通して)行っている。例①(筆者注:右の例)における当事者は桐壺帝である。「ひさしく」が当事者の主観的判断を表すことから、例①の「ひさしく」が一体どれほどの期間であるかは、帝の心象時間に尋ねる必要がある。

という指摘がなされている。甲斐氏はその文脈が明らかにしやすい『源氏物語』の用例で検討しており、一方で『万葉集』ではその文脈を確定しにくい部分を含む。しかしながらこの理解は後に検討するように、万葉集中の「久し」の用法についても妥当な理解である。

ただし、甲斐氏の説明においては「長し」との関係は説明されていない。「久し」の性格を位置付けるために、「長し」と「久し」はどの点が重なり、どの点が異なるのかを考察したい。また「否定的文脈での使用・主観性」が「久し」と関わる理由についての説明が必要である。

まず万葉集の「長し」は以下のように分類することが出来る。

一、物の長さを表わす例全十七例

【道】九例「天ざかる鄙の長道ゆ恋ひ来れば」(3・二五五)など(七)。

【植物】三例「あしひきの山菅の根し長くはありけり」(20・四四八四)など(八)。

【髪】二例「たかねば長き妹が髪」(2・一二三)など(九)。

【長屋】二例「橘の寺の長屋に」(16・三八二二)など(十)。

【天橋】一例「天橋も長くもがも」(13・三二四五)

二、物の長さを時間の長さに転ずる例全十七例《肯定的文脈》七例〔願望三例、現実四例〕《否定的文脈》十例

【年の緒】全十七例

《肯定的文脈》七例〔願望三例「あらたまの年の緒長く我も思はむ」（4・五八七）など（十一）。現実四例「あらたまの年の緒長く照る月の飽かざる君や」（12・三二〇七）など（十二）。〕
《否定的文脈》十例「あらたまの　年の緒長く　思ひ来し　恋尽くすらむ」（10・二〇八九）など（十三）。

三、時間の長さを表わす例　全九十四例《肯定的文脈》三十一例〔願望二十六例、現実五例〕《否定的文脈》六十三例

三の一、ある単位の中での相対的な長さを示す例　全二十九例《肯定的文脈》五例〔願望三例、現実二例〕《否定的文脈》二十四例

【夜】全十九例
《肯定的文脈》三例〔願望三例「夜長からなむ」（7・一〇七二）など（十四）。〕
《否定的文脈》十六例「いかにかひとり長き夜を寝む」（3・四六二）など（十五）。
【春日】全九例
《肯定的文脈》二例〔現実二例「霞立つ　長き春日を」（5・八四六）など（十六）。〕
《否定的文脈》七例「霞立つ長き春日の」（1・五）など（十七）。
【年】全一例《否定的文脈》一例「明日を隔てて年は長けむ」（10・二〇八〇）

三の二、単位が繰返して長い時間を表わす例　全三十六例《肯定的文脈》二例〔願望二例〕《否定的文脈》三十四例
【日】全三十例《否定的文脈》三十例「名張にか日長き妹が廬りせりけむ」（1・六〇）など（十八）。
【雨】全三例《否定的文脈》三例「秋萩を散らす長雨の」（10・二二六二）など（十九）。
【夜】全二例《肯定的文脈》二例〔願望二例「百夜の長さありこせぬかも」（4・五四六）など（二十）。〕
【年】全一例《否定的文脈》一例「年長く病みし渡れば」（5・八九七）

三の三、単位の無い特定の状態の長さを表わす例（二十一）　全二十九例
《肯定的文脈》二十四例〔願望二十一例「栲縄の長き命を」（2・二一七）など。現実三例「年深く長くし言へば」（4・六一九）など。〕
《否定的文脈》五例「言尽くしてよ長くと思はば」（4・六六一）など。

四、熟合した表現　全十一例《肯定的文脈》十一例〔願望十一例〕
【遠長】全九例《肯定的文脈》九例〔願望九例（二十二）「音のみも　名のみも絶えず　天地の　いや遠長く　偲ひ行かむ　み名にかかせる　明日香川」（2・一九六）など（二十三）。〕
【長く久しく】全一例《肯定的文脈》一例〔願望一例「…天地と長く久しく万代に変はらずあらむ行幸の宮」（3・三一五）〕

「長し」は「一」のように、物の長さを表わすことが出来る。また「二」のように、物の長さを時間の長さに転ずる例が見られる。「年の緒」が顕著である（十七例）が、以下にその他の例を挙げる（一部重複する個所があるため、「二」ではカウントしていない）。

「植物の長さ」に寄せる例が七例〔「あしひきの山菅の根し長くはありけり」（20・四四八四）など（二十四）〕、「玉の緒」の長さに寄せる例が三例〔「玉の緒の長き春日を思ひ暮らさく」（10

・一九三六）など（二十五。）、「川の長さ」に寄せる例が一例〔「いつしかと　我が待つ今夜　この川の　流れの長く　ありこせぬかも」（10・二〇九二）〕、「乱れ尾」の長さに寄せる例が一例〔「庭つ鳥鶏の垂り尾の乱れ尾の長き心も思ほえぬかも」（7・一四一三）〕、「栲縄」の長さに寄せる例が二例〔「栲縄の　長き命を」（2・二一七）など（二十六。）、「赤帛の純裏の衣」の長さに寄せる例が一例〔「赤帛の純裏の衣長く欲り我が思ふ君が見えぬころかも」（12・二九七二）〕、「川の下水」の長さに寄せる例が一例〔「この川の下にも長く汝が心待て」（13・三三〇七）〕見られる。

それに加え、物の長さではなく存在時間に寄せて時間的な長さを表わす例が二例見られる。「音のみも　名のみも絶えず　天地の　いや遠長く　偲ひ行かむ　み名にかかせる　明日香川」（2・一九六）のように「天地の存在時間」に寄せる例が一例、「この川の　絶ゆることなく　この山の　いや継ぎ継ぎに　かくしこそ　仕へ奉らめ　いや遠長に」（18・四〇九八）のように「山川の存在時間」に寄せる例が一例である。

次に空間的距離を介することなく時間の長さを表わす、「三」のような例は大きく三つに分けることが出来る。

まず「三の一」のように、ある単位の中での相対的な時間を表わす例が見られる。「夜」（十九例）「春日」（九例）「年」（一例）は、あくまでその始点と終点を指摘することのできる時間の単位である。そのような時間の単位を「長し」が修飾することは、同じく始点と終点を有する空間的距離を「長し」が修飾する事とも符合する。

ここで一度甲斐氏の論を振り返ると、時間の単位を修飾する「長し」は、実際の時間というよりもむしろ、主観の中にある心内時間であると言うことが出来る。その点において、甲斐氏の論が「久し」の特徴として指摘した「主観性」は「長し」の例にも見られることになる。また「否定的文脈」での使用が顕著に見られる（「三の一」全二十九例中二十四例）。

次に「三の二」のように、「長し」には時間の単位を繰り返すことで、心内時間ではなく実際に経過した時間として、より長い時間を示すという例も見られる。「日長し」のように否定的文脈での使用が多く見られる（三十例全て否定的文脈で使用）。ただし「夜」（二例）のように、希求される状態を表わす例も見られる。それらの「長し」は、始点と終点を指摘することが出来ない例として捉えることが出来る。

更に「三の三」のように、単位のない時間の長さを表わす例が見られる。「心」（二例）「恋」（二例）「思い」（六例）など、主観の内部の心情も「長し」は修飾する。それらは、「内の重の　妙なる殿に　携はり　二人入り居て　老いもせず　死にもせずして　永き世に　ありけるものを」（9・一七四〇）のように、肯定的な文脈での使用が多い（全二十九例中二十四例）。しかしそれらは仮定や願望の表現、あるいは物語歌として用いられる（現実は二例）。例えば「命」は願望表現と共起している。

ちはやぶる神の持たせる命をば誰がためにかも長く欲りせむ
（11・二四一六）

など、「命」の例の多くは、あくまで有限な存在という意識が見られる（十四例中十二例）。

一方で、悠久の時間を指すと見られる例もある。例えば同じ

「命」でも大君の命について述べるものとして、「大君の御寿は長く天足らしたり」（2・一四七）、「かくのみ故に長くと思ひき」（2・一五七）の例がある。これらの例は、必ずしも有限の存在として詠まれているわけではないかもしれないが、どちらも願望表現に近い（天皇の平癒を願う例と挽歌での使用）。また「日月の長きがごとく」（6・九三三）は悠久の時間を示す。「父母を置きてや長く我が別れなむ」（5・八九一）も永久の別れであり、悠久の「久し」に近い例と捉えられる。

「四」のような熟合した表現もまた悠久の時間を示す。「長く久しく」という表現を持つ三一五歌について、村田正博〔一九九五年〕は、『老子』（韜光第七）の「天長地久」に淵源を持つ表現であると考察している。漢籍の影響に拠る例としてやや特殊である。また「遠長し」は殆ど「久し」と同じように使われているが、これらは自身の肯定的文脈を仮定するという例としてのみ見られる（全十例）。物に寄せる例も二例見られるが、多くは物に寄せることなく、単独で用いられている。

二の二、「久し」の分析

次に「久し」について考察したい。万葉集の「久し」の用例は四十七例見られる。甲斐氏の論が例外として挙げている、

古の事は知らぬを我見ても久しくなりぬ天の香具山
（10・一〇九六）

の例のように、否定的な文脈だけでなく、肯定的な文脈で「久し」が用いられる例が八例見られる。

「久し」は「長し」に比べ、物の状態に引き付けて自身の状態が久しくなったことを示す例や、ある物に引き付けて別の物が久しくなったと表現する例が割合として多く見られる（「長し」は時間表現百二十二例中三十五例、「久し」は全四十七例中十九例）。またそれらは、「長し」の多くの場合と異なり、空間的距離の転用ではなく、全て物の存在時間を別の物や主体の存在時間に転用する例である。そのことを踏まえ、万葉集中の「久し」の例は次のように分類することが出来る。

肯定的な文脈に用いられる例全八例

①自身の状態を表わす例：〇例

②自身の状態と物の状態をともに表わす例：四例

【天地に寄せる】二例「天地と共に久しく住まはむと思ひてありし家の庭はも」（4・五七八）など（二十七）。

【香具山に寄せる】一例「我見ても久しくなりぬ天の香具山」（7・一〇九六）

【植物に寄せる】一例「勝鹿の　真間の手児名が　奥つ城を　ここと聞けど　真木の葉や　茂りたるらむ　松が根や　遠く久しき」（3・四三一）

③物の状態を表わす例：二例

【植物】一例「離磯に立てるむろの木うたがたも久しき時を過ぎにけるかも」（15・三六〇〇）

【宮】一例「月も日もかはらひぬとも久に経る三諸の山の離宮所」（13・三二三一）

④物の状態と、別の物の状態をともに表わす例：二例「…天地と長く久しく万代に変はらずあらむ行幸の宮」（3・三一五）、「天地の共に久しく言ひ継げとこのくしみ魂敷かしけらしも」（5・八一四）

否定的な文脈に用いられる例　全三十九例

①甲：自身の現実の状態を表わす例：十三例（うち否定文二例）

「草枕旅に久しくなりぬれば」（4・六二二）など（二十八）。

乙：自身の状態を仮定する例：十二例（うち否定文二例）「夢にだに久しく見むを」（15・三七一四）など（二十九）。

②自身の状態と物の状態をともに表わす例：十四例（うち否定文二例）

【植物に寄せる】八例（うち否定文二例）「真木の葉も久しく見ねば苔生しにけり」（7・一二一四）など（三十）。

【瑞垣に寄せる】三例（4・五〇一）（11・二四一五）（13・三二六二）

【衣の垢に寄せる】二例「君に逢はず久しき時ゆ織る服の白たへ衣垢付くまでに」（10・二〇二八）など（三十一）。

【自身の体の状態に寄せる】一例「朝影に我が身はなりぬ韓衣裾のあはずて久しくなれば」（11・二六一九）

③物の状態を表わす例：〇例

このうち、否定的な文脈に用いられる例は四十七例中三十九例である。甲斐氏の論の否定的文脈での使用の傾向が多いという指摘はこの点から、万葉集の用例においても首肯される。

肯定的な文脈で物の状態を「久し」と表現する例として、「植物」と「宮」が見られる。また自身の状態と物の状態をともに表わす例として、「香具山」「天地」「植物」に寄せて「久し」が表現されている。

次に否定的な文脈において、物に寄せずに自身の状態を示す例は二十五例見られる。物に寄せる例は、「植物」「瑞垣」「衣の垢」「自身の体の状態」が挙げられる。

これらの「久し」を表現するために寄せられる物の性質を分析すると、「瑞垣」の例を除き、始点や終点が不明瞭なものに「久し」が用いられていると考えることが出来る。例えば「植物」はその外見からいつからそこにあるのかを指摘することは難しい。「宮」も歴史的な知識として年代を知ることが出来ても、眼前の景色からその経過した年代を正確に知ることが出来ない。「衣の垢」も同様である。また「天地」は無条件で「久し」を導いている。単に特定の物の状態や自身の状態を示すだけでなく、物の状態に引き付けて自身の状態が久しくなったことを示す例が全四十七例中二十例見られることも、不明瞭な時間の経過を知るよすがを求めた結果として考えることが出来る。

このように「久し」は始点や終点の不明瞭さと関わる表現である。厳密には、「植物」や「宮」など、「久し」が修飾する物の存在する時間には始点と終点を指摘することが出来る。始点や終点が「存在しない」のは観察者の主観においてである。そこに、観察者の主観との関連が生じる。

次に、「久し」と「否定的文脈」との関わりについて付言したい。「いつになったら終わるか分からない」という終点が不明である表現は、願望が否定される表現と意味的に重なる。また始点が不明な例において、「いつからかわからない」という判断は「これから先もいつまでか分からない」という判断に転じるものである。「久し」は「終点の不明さ」に収束しうる表現であり、そこに「否定表現」を内包すると考えられる。

最後に、終点が明確であり、なおかつ「久し」が使われている三例について付言したい。

時ならず玉をそ貫ける卯の花の五月を待たば**久しくあるべみ**
（10・一九七五）

このような例については、甲斐氏の論において、客観的に見て短い時間であっても、「その事態に対する心象基準時間を超過していれば不都合なく用いられる。」という指摘に従いたい（三十二）。

以上のことを踏まえ、「長し」と「久し」が重なる点を列挙したい。第一に、始点と終点が分かりつつも、主観の内部で否定的状況が長く続くと感じられる状態が挙げられる（「長し」の「三の一」と「久し」の終点が分かる例（一三〇九歌、一九七五歌、三三一八歌））。第二に、始点と終点の分からない物の存在する時間に寄せることで、悠久の時間を詠む例が挙げられる（「長し」の「二」やそれに準ずる表現と、「久し」②）。第三に単位のない時間の長さを表わす例（「長し」の「三の三」と「久し」の終点が分からない例）が挙げられる。第四に「長し」の「四」の悠久の時間を示す熟合表現も、示す時間の性質は「久し」の肯定的文脈のものと重なる。

「長し」と「久し」の差異として、「長し」は空間的距離を形容することが出来、始点と終点が分かる物を形容することが出来る。単位のある時間にも用いられる事が多く、単位を繰り返す例も見られる。それに対して「久し」は主観の中で始点もしくは終点が分からない物に用いられやすく、終点の消失に収束する表現である。また「長し」の「三の三」や「四」の表現は、肯定的文脈での使用が顕著であるが、「久し」の場合は否定的文脈での使用が顕著である。

これらのことから、主観の内部での「終点の不明瞭さ」と「否定的文脈での使用」が「久し」の特徴であると考えられる。

二の三、五〇一歌や二四一五歌の「久し」

以上の「久し」の意味分析を踏まえ、改めて五〇一歌や二四一五歌の「久し」の内実について、二点検討したい。

一点目は、「瑞垣の久し」を実際に経過した時間であるとすると、神話的な時間を前提とした、やや誇張した表現と見られるという点である。

先行研究の中にはこの点について、誠実の訴えと取る説がある。鴻巣盛廣『万葉集全釈』（五〇一歌注）は、

未通女等之袖は、振山を言ひ出す為に置いただけであるが、この詞がなつかしい美女への思慕の情を、ほのめかしてゐるやうに思はれる。さうして振山乃水垣之は、その思慕の情の悠久さ、深切さ、真面目さを示してゐるやうで、全体に軽浮な感じが少しも見えない。

とする。また窪田空穂『万葉集評釈』（五〇一歌注）は、

この譬喩はそれ（筆者注：久しさの譬喩）だけにはとどまらず、その打明けに布留山の神を関係させている意味で、気分としては、誠実を誓った訴えである。なお布留の社は、上代にあっては広範囲にわたって、篤く信じられていたのであるから、それも考慮に入れるべきで、それがこの歌を美しく豊かなものとしている。

とする。

それに対し『万葉集総釈』（五〇一歌注、石井庄司氏執筆）の「恋の歌に、厳しき神の社のことを序としたところに、面白いところがある。また人麻呂の特色と考へられる。」という解釈

や、同書（二四一五歌注、春日政治氏執筆）の「さすが人麻呂の原作だけあつて、堂々たる風格がある。かくて恋も神々しくなる。」という解釈は、「神々しい恋」という理解を施している。

これらの指摘は、「瑞垣の」を歌の文脈と関わると見て、その久しい時間の質を求めている点で重要であると考える。ただし「神々しい恋」という理解に対しては、「久し」が主観を基にした表現と見れば、実際の経過時間を問題とせずとも、主観の中での始点や終点の消失を考えれば説明は付く。

二点目に、『万葉集釈注』（五〇一歌注）の、五〇一歌は歌群的判断から「逢い得ての思い」であると解しているという点を取上げたい[三十三]。

これに対し、前節での考察によれば、「久しさ」は主観の内部における、否定的状態の継続という性格を持つ。たしかに「ゆ」とある以上「久しい以前から」と訳し、始点が消失した状態であると捉えることは動かない。しかし「久し」の他の例は、始点の消失が終点の消失に転ずる。また「ゆ」について、『万葉集注釈』（五〇一歌注）に、「たゞ久しい以前から、といふだけでなく、その昔から今まで、長い間をずつと、といふ意味に解くべきである。」という指摘がある。これらのことから推すと、「久しい以前からあなたのことを思っていたし、これから先も逢うのはいつになるか分からない。」と解することも可能である。前者の理解においては、「瑞垣」は「久し」を導くが「逢い得ての思い」という歌の主想とは関わらない。それに対して後者の理解の場合、「瑞垣」は「逢えない状態」という歌意を象徴する存在として機能すると捉えうる。その二つの見方を比べた時に、「瑞」の字義と形状言「ミヅ」の意義を考え合わせると、後者の方が整合性が高いと考える。次節において、その可能性を検討したい。

三の一、「瑞」の分析

「瑞垣」の「ミヅ」の用字には「水」（崇神記、五〇一歌、二四一五歌）「瑞」（崇神紀）「楉」（三二六二歌）がある。

「楉」の用字については早く『冠辞考』に言及がある（後述）。また窪田空穂『万葉集評釈』（三二六二歌注）に、「楉」は「わが国の造字で「瑞」に当てたもの。」という指摘がある。また「水」の用字について、形状言「ミヅ」を持つ用例で水に関わる状態であることが明確に分かる用例は見られない（後述）。「水」は借訓仮名と考えられる。

「ミヅ」を美称と見る宣長は「瑞」の字は当たらないとしている。しかし以下に述べる理由から、『日本書紀』に使われている「瑞」の字が「ミヅ」に一番近いと考える。

「瑞」を「ミヅ」と訓む例に、

瑞、此云弥図（ミツナラム、ミヅツ）　（神代紀上、第四段一書第一）

是何瑞也　（仁徳紀即位前記・前田本）

がある。

まず、「瑞」の字義を確認したい。『説文』には「以玉為信也、从王耑聲」とある[三十四]。この「信」の意義について、『玉篇』（大広益会玉篇）には「信節　諸侯之珪」とある。

この信節は、「天子為二両将未一レ有レ利、乃使下衛山因二兵威一往

諭中右渠上。右渠見二使者一頓首謝、願レ降、恐二両将詐殺一レ臣。今見二**信節**一。請服降。」（『史記』朝鮮列伝）とある。この「信」の義は、「節信」として「朱虚侯已殺レ産。帝命二謁者一持レ節労二朱虚侯一。朱虚侯欲レ奪二**節信**一。謁者不レ肯。朱虚侯則従与載、因二節信一馳走、斬二長楽衛尉呂更始一、還馳入二北軍一、報二太尉一。」（『史記』呂后本紀）とあるように、「証拠」の意と解すことが出来る。「信節」は「符節」と同じく、皇帝の使者が持つ割符の意と解される。『篆隷万象名義』には「信也応也符也」とあり、「符」という説明が加えられている。『新撰字鏡』（天治本）にも「符也信也応也玲也」とある。

用例として、いわゆる瑞祥としての用例が多く見られるものの、辞書の記述には『説文解字』の「以玉為信也」という説明がむしろ基底にあるように見える。これは「天子が諸侯を封ずる時に賜はる圭。」(三十五) と見て良いだろう。

そのような例として、『詩経』「錫二爾介圭一、以作二爾宝一」（大雅、崧高）の毛伝に、「宝瑞也」とある。「介圭」は「天子が諸侯を封じる際に授けた玉のこと。」、「宝」は「諸侯の身分を証明する玉のこと。」(三十六) と解される。

また『周礼』（春官、典瑞）「典瑞。掌二玉瑞玉器之藏一。」の鄭玄注に「瑞符信也。」とある。

更に『文選』（巻二十六、贈張徐州謖、笵彦龍）「軒蓋照二墟落一、伝瑞生二光輝一」の「伝瑞」について、李善注に「周礼曰典瑞。鄭玄曰　瑞　信節也」とある。

このように「瑞」には諸侯を封じる際に授けた玉という用例が見られ、辞書類にそちらの意味として主に引かれている。この点について、『説文解字』段玉裁の注に「引伸為二祥瑞一者、亦謂下感召若中符節上也。」（「引伸して祥瑞と為る者も、亦た感召すること符節の若きを謂ふ也。」）とあるのが参考になる。即ち、「諸侯を封じる際に授けた玉」は皇帝から人に権威を分け与えるものとしてあり、「瑞祥」は神から皇帝に、神の霊威を分け与えるものとしてある。統一して解釈するならば、「力を分ける」という意味が「瑞」の字義の基底にあると考えられる。(三十七)

三の二、形状言「ミヅ」の分析

次に、「瑞」がなぜ「ミヅ」の字として当てられているか考えたい。

『冠辞考』には、

みづてふ語は、先は草木の若くうつくしく栄ゆるをいふより、万づの物を讃稱てみづ云云とはいひけらし、同し巻に、槻の木に水枝指とよみ、世にも若木をみづ木、若枝をみづえ、わかくすくよかなる人をみづ〳〵し、などいふを思へ、さてこれに依に、崇神の御時はまだ万づの事かりそめのことくなりければ、みづ〳〵しき若木などして籬せさせ給ふ事の有つらんを、ほめ稱て宮の名とせられしなるべし、即此よみ人もさる意を得て楛垣とは書けんかし

とある。三二六二歌の「楛」の用字に「若し」の意を見ている。また「みつみつし」の説明に「今しも万づの物のわかくうつくしきをみづ〳〵しとはいふめり」とある。『冠辞考』は近世の語感から「ミヅ」に「みづみづし」と同じ、「若し」の意を見ている。

それに対して『古事記伝』は先述のように、「ミヅ」を美称

と捉えているが、「若し」という意味は見ていない。また「水」は意味としては当たらないと考えている点が注意される。

近代以降の注釈では「みずみずしい」という意味の美称として捉えている。『時代別』を再掲すると「形状言。若々しく生き生きとしたさま。（後略）」とある。

「ミヅ」を持つ語として、『時代別』には「瑞垣」のほかに「瑞枝」（「みずみずしく生き生きとした枝。」（『時代別』の説明。以下同じ）、「瑞茎」（「みずみずしい草木の茎の意か。」）、「瑞玉盞」（「みずみずしい玉のような杯。ミヅ、タマともに美称。」）、「瑞歯」（「歯をほめていう。」）、「瑞葉」（「若々しい葉。」）、「瑞穂」（「みずみずしい穂。稲穂を言う。」）「瑞山」（「みずみずしく美しい山。若葉の山を言う。」）が挙げられている。これらの語の『時代別』の説明にも、「みずみずしい」という語が使われている。

「みずみずし」は『日本国語大辞典』によると、「「みずみず」の形容詞化か。」とされる。「みずみず」は同書に「「みんずり」と同語源か。」とされ、「みんずり」は「みずみず（瑞瑞）」の「みず」から転じた語」とされる。しかしながら、上代の形状言「ミヅ」と「みずみず」との間には意味上の隔たりが見られる。

「みんずりと」は『時代別国語大辞典室町時代編』に「淡泊で、あっさりとしたさま。」とされる。『邦訳日葡辞書』には「Minzurito.ミンズリト（みんずりと）例、Minzurito xita agiuai.（みんずりとした味はひ）軽くてあっさりした、食物などの味。比喩。Minzueito xita fito.（みんずりとした人）素直で無邪気な人。」とある。

また「みづみづと」は『時代別国語大辞典室町時代編』に、「いかにもさらりとして、何の抵抗も感じられないさま。」とされる。『五音三曲集』に、「甘節とはあまきふしなれば、甘かるべきなれども、さのみ甘ければ、濃き味はいにて悪し。さるほどに、水々と言ひなせば、幽玄に面白く聞ゆる也。」とある。濃い味の対で使われる「みづみづと」には、水分の意味が含まれている。

それに対して、『時代別』（上代編）に載る「ミヅ」を持つ語に、明確に水分の意が見られるものはない。また上代において、水を含んだ状態は「うるふ」で表現される。[三十八]

このように「ミヅ」から「みづみづし」の間には、中世の「みんずり」「みづみづと」を経由していると考えられ、そこで水分を含んだ状態を示すように意味が転じているように見られる。

上代の「ミヅ」について、川端善明〔一九七八年〕に「ミドリ（緑、ド乙、…）の被覆形は、ミド（乙）の交代形ミヅ（瑞…）として認められる。」（第二部第一章第二節四十一項[三十九]）とあることに注目したい。

「ミヅ」と「緑」との関係について、早く武田祐吉『万葉集全註釈』（三二六二歌注）は「瑞垣」を、

生垣程度の物でなくして、大きな樹木の障壁をいい、結局、神社の樹叢をいうのであろう。日本書紀にいう天津神籬、古事記にいう青柴垣など、籬、垣などの文字を使用するものと関係があるのであろう。それでその樹叢がもの古びているので、久シキに冠しているのだろう。

と捉えている。また『万葉集全注』（五〇一歌注、木下正俊執筆）は、

「瑞垣」は崇神天皇の「磯城瑞籬宮」の号にも用いられ、そのミヅは古事記伝（二三）以来単なる美称と解されているが、「瑞枝」「瑞山」などの例から推して、みずみずしい、の原義と見てよく、常緑樹を植え込んで結界としたのではなかろうか。

とする。更に『新編日本古典文学全集』（三二六二歌注）に「神域の結界標示に植え渡した常緑樹の生垣をいう。」とある。これらの注では「瑞垣」を樹木の垣を示すと考えている。その明確な理由は示されていないが、川端氏の指摘のように、ミヅと緑との関係を見ているのであろう。その上で「瑞垣」が「久し」を導くことから「常」緑という性格を見ている。常緑樹というのは、一つの妥当な解釈であると思われる。

ただし、『類聚名義抄』（観智院本）によると「瑞垣」の語頭アクセントは平声になっている。「緑」の語頭アクセントは上声であるため、語頭アクセントが異なる。一方で蓮成院本では「瑞垣」の語頭アクセントは上声となっており、異同が見られる。

「ミヅ」の語頭アクセントを上声とするものとしては、蓮成院本の他に『古語拾遺』（歴仁本）「磯城◆〈山＋耑〉垣朝（ミツカキノミヤニ）」の「◆〈山＋耑〉垣」の語頭、「葦原瑞穂（ミヅホ）国」の「瑞穂」がある（四十）。

「ミヅ」の語頭アクセントを平声とするものとしては、『日本書紀』神代紀上、第四段一書第一「瑞、此云弥図」（弘安本、乾元本、嘉暦本、明徳本）がある。

ただし「ミヅラ」について、乾元本は語頭アクセントを上声にする。御巫本日本書紀私記においても、「ミヅラ」は平声が一例、上声が一例見られる。なお『類聚名義抄』（観智院本）は平声としており、観智院本において「瑞垣」と「ミヅラ」の語頭アクセントは一致している。

このように「ミヅ」の語頭アクセントには異同が見られる。平声と見る『類聚名義抄』（観智院本）は、あるいは「ミチリ（充）」「ミチル（満）」（どちらも語頭アクセントは平声）と同語源と見ている可能性がある。

ただし、形状言「ミヅ」を持つ語において、「瑞山」は、

…大和の　青香具山は　日の経の大き御門に　春山と　しみさび立てり　畝傍の　この**瑞山**は〔此美豆山者〕　日の緯の　大き御門に　**瑞山と〔弥豆山跡〕**　山さびいます耳梨の青菅山は…　（2・五二）

とあり、「香具山」や「耳梨の　青菅山」と併記される。「瑞山」の例は明確に「緑」の意と関わると解される。また『万葉集全註釈』等の指摘を考えると、「緑」の意を考えた方が自然であるが、語頭アクセントだけでは決し切らない点がある。

以上のように、語頭アクセントの問題はあるものの、「ミヅ」の意義として「緑」が考えられる。しかしながら、「瑞穂」は穂が「緑」であるより「実る」状態である。更に「瑞枝」について、「百足らず　みそ槻が枝に　**みづ枝さす〈水枝指〉**　秋のもみち葉」（13・三二二三）では「黄葉」としてあり、「常緑」という性質と合致しない例として挙げられる。これらの例を見ると、「ミヅ」の語義が必ずしも常緑樹に限定的だとは言いにくい。

上代の「緑」について、佐竹昭広〔一九五五年〕に、ミドリ

は上代では「新芽」の意味が基本であるとする指摘があることに注目したい。佐竹氏は、「時としてそれが色名のように用いられることがあったとしても、それは転用・隠喩の類で」あるとする。その根拠として、色名を示す緑が万葉集では二例、古今集では四例しかないことや、「題材を植物に、季節を春夏新緑の候に局限しているという特徴」があること、また『日葡辞書』の、「緑」を「木々の若枝、または、木々の新芽。また、野原の新緑。例 Yamamo nobemo midorini naru.（山も野辺も緑になる）山々も野原も緑で覆われる、あるいは、再び新緑になる。Midoriga tatçu（緑が立つ）このような新芽、あるいは、若枝が出る。」とする記事（四十一）、「ミドリ」を新芽と取る各地の方言を挙げている。

更に三の一節において「瑞」の字義を「力を分ける」と考えたが、和語「ミヅ」との関係がいま一つ明らかではない。そこで、「新芽」が「分かれる」様を考えることで、整合性を見たい。

前掲の川端氏の論では「ワキ」（若）に「ワク」（分）との交代を見ている。川端氏は『古語拾遺』にある、

是に於て、素戔嗚神、日神〔天照大神〕に奉辞として天に昇ります時に、櫛明玉命迎へ奉りて瑞八坂瓊曲玉を以て献る。素戔嗚神、之を受けて日神に転奉りたまふ。仍て共に約誓て、即ち其の玉を感ぜしめて、天祖吾勝尊を生れます。是を以て天照大神吾勝尊を育ひたまひて、特に甚だ鍾愛したまふ。常に腋の下に懐いたまふ。称て**腋子**と曰す。〔今俗の、稚児を和可古と号くるは、是れ其の転ぜる語也〕

から、腋子という語が「その語源説話的な成長の下に保存しているものは、ワキの音形態が、「若」を意味する形状言の一語形だということであろう。」（第一部第二章第二節二四三ページ）とする。また他の個所に、「ワカ語形から強及び弱形式的に動詞ワク（分、四・下二）が成立し」（第二篇第三章第二節一八五ページ）とある。また形容詞ワカシ（若）と下二段動詞ワク（分）との関係について、「（筆者注：現代の目から見ると）ワクには、その交代的な一語形ワカから実現した形容詞ワカシ（若）が意味的に親近して、同じくそれから実現した下二段動詞ワク（分）が親近せず」（第二篇第四章第一節二四二ページ）と捉えている。そのことを念頭に置き、新芽が分かれる様を考える事は、三二六二歌の「楛」の用字とも合致する。

そのようにして、和語の「ミヅ」の語義の基底には「分かれたもの」という様相的意味があり、そこから「新緑」という意味に通ずると解することが出来る。

「瑞枝」は枝が分かれる状態と解される。また「瑞葉」は分かれて芽ぐみ出た葉と解することが出来る。更に「瑞穂」も穂が分かれて実る状態と捉えられる。

「瑞歯」には、「生れましながら、歯一骨の如くにして、容姿美麗なり。」（反正前紀）という用例がある。『時代別』には「歯を誉めて言う」とあるが、（生まれたばかりであるにも関わらず）「一つ一つの歯がはっきりと分かれ際立った状態の歯」と捉えられる。『時代別』には挙げられていないが、「ミヅラ」（角髪・髻）（「男子の髪型。髪を左右に分け、わがね束ねたもの。（後略）」（『時代別』））も髪が分かれた状態と解される。

新緑に接近する例として、先述の「瑞山」が挙げられる。「新芽」の意味での「緑」と通じ、「若葉」の「青い」状態と解すのが良いだろう（四十二）。

和語の「ミヅ」は「分かれた」状態を指すのか、「分ける」という動作を指すのかは用例からは判断できない。しかし和語の「ミヅ」は、意味内容としては「分ける」という意味を持つと解される。

四、枕詞「瑞垣の」と「久し」の関係

第一節を通して見たように、「瑞垣」が神社の垣であるから久しさを導くとする従来の説は、上代における瑞垣と神社の垣との関わりが確実なものではなく、更に「斎垣」「玉垣」など神社の垣を示すとされる他の複合語が「久し」を導かないという点が問題であった。そこで本稿では「ミヅ」に「久し」を導く要素を見た。

「久し」の性質を見ると、甲斐氏の論に指摘されているように、逢う状況が叶わないという文脈で使われている。第二節を通して見たように、万葉集の用例についても同じことが観察できる。そこには実際に長い時間が経過している例もあり、また主観の内の心内時間を指す例もあるが、相手と離れている状態が続くときに「久し」は使われやすく、多くは恋歌の文脈で使われている。一方で三の一節において、「瑞」の字義の基底には「力を分ける」という意味があると考察した。また三の二節において、形状言「ミヅ」の語義の中には「分ける・分かれる」という様相の意味を含み、そこから「新緑」の意義に派生すると考えた。

以上の事から、「瑞垣」と「久し」との関わりについては、従来のように「ミヅ」に緑の意を見て、新芽から「若し」の意を見、緑という性質の外にある「いつまでも」を補った上で「久し」に続くと考えるよりは、瑞垣の「ミヅ」に「内と外とを分ける」或いは「分かれた状態にある」という意を見て、「隔てられて久しい」という意味のつながりを考えた方が自然であると考える。「大きな樹木の障壁」(『万葉集全註釈』)や「神域を限る垣」(『新潮日本古典集成』五〇一注)、「結界」(『万葉集全注』)とある説明が端的であろう。内と外とを分けることが重要であり、そのことが「久し」と結び付く契機であった。

後世の「神社の垣」としての「瑞垣」もそのように捉えられる。『皇太神宮儀式帳』(一太宮壹院)を見ると、「正殿壹区」「宝殿二宇」の次に「瑞垣一重」があり、「宿衛屋四間」「御門十一間」「玉垣三重」と続く。正殿に一番近い内側の垣が「瑞垣」であるとされる。後世の例ながら、物としての「瑞垣」は神に一番近いところにあり、そこで神と人とを隔てる物としてある。隔てているものと隔てる行為とは違うものではあるが、「瑞垣の久し」は分けられて久しいという付帯文脈を伴っている。少なくともこれまでの考察はそれに反さない。また先述のように『和名類聚抄』では「瑞垣」は「斎垣」と同一視されていたが、斎垣もまた、本来は超えることが出来ないものとして万葉集の中に詠まれている。

ちはやぶる神の**斎垣**〈伊垣〉も越えぬべし今は我が名の惜しけくもなし　(11・二六六三)

禁忌に触れないようにするという「斎む」という行為は、人が行う動作である。「斎垣」は実体に対する、人の立場からの形容として捉えられる。それに対して「瑞垣」は、実体の形容だ

けではなく、その性質を表わしていると考えられる。

ここで五〇一歌、二四一五歌、三二六二歌の「瑞垣の久し」の解釈に戻りたい。

娘子らが袖布留山の**瑞垣の〈水垣之〉**久しき時ゆ思ひき我は

（4・五〇一　柿本朝臣人麻呂歌三首　略体歌）

娘子らを袖布留山の**瑞垣の〈水垣之〉**久しき時ゆ思ひけり我は

（11・二四一五　寄物陳思　非略体歌）

瑞垣の〈楮垣〉久しき時ゆ恋すれば我が帯緩ふ朝夕ごとに

（13・三二六二　或本反歌）

まず三二六二歌において、恋をすることと帯が緩むことの関係からは、逢えないという状況を読み取ることが出来る。

五〇一歌や二四一五歌においても、他の「久し」の例から推して、やはり作者と女性との間は隔たれていて、逢えない状況が想定できる。「袖振る」は序の中での行為であり、実景ではないが、袖を振ることと瑞垣というのは、実は相反する語句だったのではないか。鉄野氏の指摘のように「袖振る」という行為は、思う相手に見られることを期待する相聞的な行為である。それに対して「瑞垣」は「内と外とを分ける」垣として捉えられる。その二つは背反のものであるが、それらが対立的に導出される。そのような二重の序として捉えることが出来る。袖振山という序を持っていながらも、実際には逢えない。それでもなお相手の事を思っているということが、この歌の主意なのではないか。

また万葉集には「見ず久ならば」というフレーズがある。

梓弓引豊国の鏡山**見ず久ならば**恋しけむかも

（3・三一一・桉作村主益人、豊前国より京に上る時に作る歌一首）

益人は天平六年ごろの作を持つ歌人とされる。この歌も見る物である「鏡」(四十三)と「見ず」が対置しており、構造的には五〇一歌や二四一五歌に良く似ている。文脈的に対立する序と被枕という表現効果と表現類型が存外にあるのかもしれない(四十四)。またそれが天平年間にもあったということから、そのような類型の存在を予想させる。更に「見ず―久」と連用中止形で言いさした形での続き方は、「瑞垣の久し」という続き方と、内容的には同質であっただろう。仮名は異なり、また掛詞であるとすることも出来ない。しかしながら、意味内容としてはそのような仮名の違いを超えた類同性があると言うことが出来るのではないか。

以上のように「瑞垣」は「内と外とを隔てる」という文脈を示す語であり、「瑞垣の久し」は、「瑞垣」によって隔てられ、分けられることから、「逢わなくて久しい」という内容を導くという、修辞的な技法であると考える。その点により、賀古氏の論が指摘するような、久しき「思い」との固定的な関係が見られると考える。その被枕との関係は習慣的・固定的であり、その点からすれば現代の基準では枕詞に近い。しかしながら枕詞「あしひきの」や「ひさかたの」のように作者とは異なる文脈で独立語化するのではなく、普通名詞のように用いられる。また作者と別次元にある枕詞とは異なり、歌意とも関わる。そのため先述のように、現代の基準で枕詞か序詞か分類しようとした際に、揺れが生じやすい。そのような位相にあり、かつ特

定の文脈を想起する指標となる語（文脈指標語）としての性質が、「瑞垣の」には見られるのである。

［注］

（一）澤瀉久孝〔一九三七年〕、稲岡耕二〔一九七二年〕など。

（二）福井久蔵〔一九二七年〕、高志覚成〔一九四〇年〕、土橋寛〔一九六〇年〕、井手至〔一九七五年〕、駒木敏〔一九八五年〕など。

（三）発生論的に枕詞と序詞を区別する論として、折口信夫〔一九二九年A〕は序詞が簡潔になって枕詞となったとする。また土橋寛〔一九七一年〕は神託起源の枕詞と民謡起源の序詞と区別する。なお大久保正〔一九五五年〕は土橋氏の説（該当箇所の初出は一九五四年）を引きつつ、序詞的枕詞の存在や、序詞を民謡に帰着することが出来るかを課題とする。

（四）五〇一歌と二四一五歌の先後関係にも注釈史上揺れが見られる。五〇一歌を人麻呂の作、二四一五歌を民謡と見て、人麻呂作が民謡化したと見る説は五〇一歌を先と見、民謡から取材して人麻呂作になったと見る説は二四一五歌を先と見る。

・五〇一歌から二四一五歌とする説：『万葉集注釈』（二四一五歌注）

・二四一五歌から五〇一歌とする説：窪田空穂『万葉集評釈』（二四一五歌注）『万葉集全註釈』（二四一五歌注）『万葉集全注』（二四一五歌注）『万葉集釈注』（二四一五歌注）

なお『万葉集私注』（二四一五歌注）は、「真淵の如く、巻十一を古い伝ときめてかからずに、ここは細部批判に立脚して、正しい断定を得た上で、更に推論すべきである。」とする。

（五）『万葉集全注』（五〇一歌注）の指摘による。なお、折口信夫〔一九一九年〕（万葉集辞典）に一案として、垣根に瓢を這わした習慣から「久（ヒサ）」を連想したという説が載る。「久し」との従来の続き方に疑問を呈するという点で注目すべき指摘である。折口信夫〔一九二九年B〕に言及される柳田国男〔一九二二年〕には、「人の魂が体外に保管せられ得るとした、古い〳〵思想が形円く内うつぼなる「なりひさご」という一物を通じて、終に今代まで連綿し来った消息をも窺ひ知らしむる端となるのである。」という指摘がある。枕詞「瑞垣の」を瓢との関わりをもって説明する説を積極的に否定する根拠を本稿は持たない。しかし万葉集中「瓢」が詠まれた例や、「瑞垣」と取り合わされた例は見られないため、万葉集の用例からの帰納を試みる場合、そこに難点を含む。

（六）『万葉集注釈』は二四一五歌の方では、「少女に対して袖を振る、その布留の山の瑞垣のやうに、久しい時の間を思ってゐたことであったよ。自分は。」と訳出している。

（七）（4・五三六）（4・七八一）（5・八八四）（5・八八八）（12・三一三二）（15・三六〇八）（15・三七二四）（20・四三四一）

（八）四四八四歌の【根】のほかに、【萩の末】一例「我がやどの萩の末長し」（10・二一〇九）、【芝草】一例「道の芝草長く生ひにけり」（6・一〇四八）。

（九）「人皆は今は長しとたけと言へど君が見し髪乱れたりとも」（2・一二四）

（十）「橘の照れる長屋に」（16・三八二三）

（十一）「母の命の言にあらば年の緒長く頼み過ぎむや」（9・一七七四）、「我は参ゐ来む年の緒長く」（20・四二九八）

（十二）「あらたまの　年の緒長く　住まひつつ　いまししものを」（3・四六〇）、「年の緒長く仕へ来し」（13・三三二四）、「年の緒長く相見てし」（19・四二四八）

（十三）「年の緒長く我が恋ひ居らむ」（11・二五三四）、「新玉の年の緒長くかく恋ひば」（12・二八九一）、「あらたまの年の緒長くいつまでか我が恋ひ居らむ」（12・二九三五）、「あらたまの年の緒長く逢はざれど」（15・三七七五）、「行き変はる　年の緒長くしなざかる　越にし住めば…語り放け　見放くる人目　ともしみと　思ひし繁し」（19・四一五四）、「あらたまの年の緒長く我が思へる児らに恋ふべき月近付きぬ」（19・四二四四）、「天の川隔りにけらし年の緒長く」（20・四三〇八）、「妻別れ悲しくありけむ年の緒長み」（20・四三三三）、「あらたまの　年の緒長く　相見ずは　恋しくあるべし」（20・四四〇八）

（十四）「玉くしろまき寝る妹もあらばこそ夜の長けくも嬉しかるべき」（12・二八六五）、「いつしかと　我が待つ今夜　この川の流れの長く　ありこせぬかも」（10・二〇九二）

（十五）「長き夜をひとりや寝むと」（3・四六三）、「明かしつらくも長きこの夜を」（4・四八五）、「黒髪敷きて長きこの夜を」（4・四九三）、「秋の夜の長きにひとり寝るが苦しさ」（8・一六三一）、「長き夜を君に恋ひつつ」（10・二二八二）、「思ふらむ秋の長夜を」（10・二三〇二）、「秋の夜を長しと言へど」（10・二三〇三）、「丸寝そ我がする長きこの夜を」（10・二三〇五）、「あしひきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜を一人かも寝む」（11・二八〇二・或本歌）、「ぬばたまの夜を長みかも我が背子が夢に夢にし見え反るらむ」（12・二八九〇）、「旅寝えせめや長きこの夜を」（12・三一五二）、「恋ひや明かさむ長きこの夜を」（13・三二四八）、「夜を長み」（15・三六八〇）、「秋の夜を長みにかあらむ…ひとり寝ればか」（15・三六八四）、「大君の命恐み弓の共さ寝か渡らむ長けこの夜を」（20・四三九四）

（十六）「梅の花咲き散る春の長き日を」（17・四五〇二）

（十七）「菅の根の長き春日を恋ひ渡るかも」（10・一九二一）、「恋ひや暮らさむ」（10・一九二五）、「菅の根の長き春日を思ひ暮らさむ」（10・一九三四）、「玉の緒の長き春日を思ひ暮らさく」（10・一九三六）、「使ひの来ねば」（13・三二五八）、「忘れて思へや」（17・四〇二〇）

（十八）「君が行き」（2・八五）、「君が行き」（2・九〇）、「かくし待たえば」（4・四八四）、「相見ずて」（4・六四八）、「君が行き」（5・八六七）、「浅茅押しなべさ寝る夜の」（6・九四〇）、「旅の日長み」（6・九四二）、「日長く恋ひし」（6・九九三）、「草枕旅の憂へを」（9・一七五七）、「思ほゆるかも」（10・一八六〇）、「霞立つ春の永日を恋ひ暮らし」（10・一八九四）、「恋ふる心ゆ」（10・二〇一六）、「恋しくは」（10・二〇一七）、「逢はなくは」（10・二〇三八）、「恋しけく」（10・二〇三九）、「川に向き立ち」（10・二〇七三・七夕歌）、「恋ふる日は」（10・二〇七九）、「恋ふる日の」（10・二二七八）、「恋しくの」（10・二三三四）、「日長く恋ひし」（10・二三四七）、「日長く恋ひし」（11・二六一四・或本）、「夢に見えずて」（11・二八一四）、「夢にも見えず」（11・二八一五）、「恋ひつつか来む」（12・三一五〇）、「恋ひにけるかも」（15・三六六八）、「恋しけく」（17・三九五七）、「恋しけく」（17・四〇〇六）、「年の恋」（18・四一二七）、「長き日を待ちかも恋ひむ」（20・四三三一）

（十九）「長雨忌み」（16・三七九一）、「卯の花を腐す長雨の」（19・四二一七）

（二十）「今夜の長さ五百夜継ぎこそ」（6・九八五）

（二十一）なお、三の三をさらに細かく分けるとしたら、以下のよう

になる。

三の三の一、有限の時間を表わす例全二十二例《肯定的文脈》十八例〔願望十六例、現実二例〕《否定的文脈》四例

【心】全二例

《肯定的文脈》一例〔願望一例「おくてなる長き心に」（8・一五四八）〕

《否定的文脈》一例「乱れ尾の長き心も」（7・一四一三）

【恋】全二例《否定的文脈》二例「後れ居て長恋せずは」（5・八六四）、「夕霧に長恋しつつ寝ねかてぬかも」（12・三一九三・一云）

【思い】全六例

《肯定的文脈》五例〔願望三例「言尽くしてよ長くと思はば」（4・六六一）、「たまきはる命は知らず松が枝を結ぶ心は長くとそ思ふ」（6・一〇四三）、「赤帛の純裏の衣長く欲り我が思ふ君が見えぬころかも」（12・二九七二）。現実二例「年深く長くし言へば」（4・六一九）、「はじめより長く言ひつつ」（4・六二〇）〕

《否定的文脈》一例「この川の下にも長く汝が心待て」（13・三三〇七）

【命】全十二例《肯定的文脈》十二例〔願望十二例「栲縄の長き命を」（2・二一七）、「栲縄の長き命を欲しけくは」（4・七〇四）、「長く欲りする」（6・九七五）、「長く欲りせむ」（11・二三五八）、「長く欲りせむ」（11・二四一六）、「長く欲りすれ」（12・二八六八）、「長く欲しけく」（12・二九四三）、「玉の緒の長き命の惜しけくもなし」（12・三〇八二）、「命を長くありこそと」（13・三二九二）、「玉の緒の長くと君は言ひてしものを」（13・三三三四）、「長く欲りせし」（16・三八一三）、「長くとそ思ふ」（20・四四九九）〕

三の三の二、久しと接近する例全七例《肯定的文脈》六例〔願望四例、現実二例〕《否定的文脈》一例

【命】全二例《肯定的文脈》二例〔願望二例「大君の御寿は長く天足らしたり」（2・一四七）、「かくのみ故に長くと思ひき」（2・一五七）〕

【世】全三例《肯定的文脈》三例〔願望二例「奥つ城を　我が立ち見れば　永き世の　語りにしつつ」（9・一八〇一）、「親族どち　い行き集ひ　永き代に　標にせむと　遠き代に　語り継がむと　処女墓　中に造り置き」（9・一八〇九）。現実一例「内の重の　妙なる殿に　携はり　二人入り居て　老いもせず　死にもせずして　永き世に　ありけるものを」（9・一七四〇）〕

【別れの長さ】全一例《否定的文脈》一例「父母を置きてや長く我が別れなむ」（5・八九一）

【悠久の時間】全一例《肯定的文脈》一例〔現実一例「日月の長きがごとく」（6・九三三）〕

（二十二）四二三歌とその一云は合わせて二例と数えた。

（二十三）「延ふ葛の　いや遠長く〈一に云ふ「葛の根の　いや遠長に」〉万代に　絶えじと思ひて〈一に云ふ「大舟の　思ひ頼みて」〉」（3・四二三）、「玉かづら　いや遠長く　祖の名も　継ぎ行くものと　母父に　妻に子どもに　語らひて　立ちにし日より」（3・四四三）、「仕へむものと」（3・四五七）、「かくしもがもと」（3・四七八）、「絶えめやと」（12・三〇五〇）、「さなかづら　いや遠長く　我が思へる」（13・三二八八）、「富士の嶺の　いや遠長き　山路をも」（14・三三五六）、「この川の　絶ゆることなく　この山の　いや継ぎ継ぎに　かくしこそ　仕へ奉らめ　いや遠長

に」（18・四〇九八）

（二十四）【菅の根】三例「菅の根の長き春日を恋ひ渡るかも」（10・一九二二）など。〔（10・一九三四）（20・四四八四）〕、【葛の根】一例〈一に云ふ「葛の根のいや遠長に」〉（3・四二三）。【蔦】一例「延ふ葛のいや遠長く（3・四二三）。【かづら】二例「玉かづらいや遠長く」（3・四四三）など。〔（13・三二八八）〕。

（二十五）「玉の緒の長き命の惜しけくもなし」（12・三〇八二）、「玉の緒の長くと君は言ひてしものを」（13・三三三四）

（二十六）「栲縄の長き命を欲しけくは」（4・七〇四）

（二十七）「天地と久しきまでに万代に仕へ奉らむ黒酒白酒を」（19・四二七五）

（二十八）「幾久さにもあらなくに」（4・六六六）、「逢はず久しくなりぬ」（7・七六八）、「幾久さにもあらなくに」（11・二五八三）、「逢はず久しくなりぬ」（12・三〇八二）、「旅の夜の久しくなれば」（12・三一四四）、「久しく待てど来まさぬ」（12・三二〇六）、「見ず久にして」（14・三五四七）、「別れて久になりぬれど」（15、三六〇四）、「見ぬ日久しみ恋しけむかも」（17・三九九五・一云）、「妹に逢はず久しくなりぬ」（17・四〇二八）、「見ず久に」（18・四一二一）、「見ず久に」（19・四一七〇）

（二十九）「見ず久ならば恋しけむかも」（3・三一一）、「我が行きは久にはあらじ」（3・三三五）、「明日といはば久しくあるべし」（7・一三〇九）、「久しくもあらむ」（10・一九〇一）、「久しくあるべみ」（10・一九七五）、「相見ずて恋ひむ年月久しけまくに」（11・二五七七）、「久にあらむ君を思ふに」（12・三二〇八）、「久ならば　いま七日だみ」（13・三三一八）、「旅に久しくあらめやと」（15・三七一九）、「君が目を見ず久ならば」（17・三九三四）、「君が行きもし久にあらば」（19・四二三八）

（三十）「三笠山野辺行く道はこきだくも繁く荒れたるか久にあらなくに」（2・二三二）、「三笠山野辺ゆ行く道こきだくも荒れにけるかも久にあらなくに」（2・二三四）、「市の植木の木垂るまで逢はず久しみ」（3・三一〇）、「萩の花咲けるを見れば君に逢はずまことも久になりにけるかも」（10・二二八〇）、「我妹子に逢はず久しもうましもの阿倍橘の苦生すまでに」（11・二七五〇）、「浜久木久しくなりぬ君に逢はずして」（11・二七五三）、「若久木我が久ならば妹恋ひむかも」（12・三一二七）

（三十一）「我が旅は久しくあらしこの我が着る妹が衣の垢付く見れば」（15・三六六七）

（三十二）一三〇九歌（「明日といはば久しくあるべし」）や三三一八歌（「久ならば　いま七日だみ」）の例も同様に、七日という期限付きの日数を「久し」と表現している。

（三十三）五〇一歌を含む歌群は以下である。

柿本朝臣人麻呂が歌三首

娘子らが袖布留山の瑞垣の久しき時ゆ思ひき我は〔憶寸吾者〕（4・五〇一）

夏野行く小鹿の角の束の間も妹が心を忘れて思へや〔忘而念哉〕（4・五〇二）

玉衣のさゐさゐしづみ家の妹に物言はず来にて思ひかねつも〔思金津裳〕（4・五〇三）

柿本朝臣人麻呂が妻の歌一首

君が家に我が住坂の家道をも我は忘れじ命死なずは（4・五〇四）

右の歌群について、伊藤博〔一九九一年〕が指摘するように、

五〇三歌が離別の内容を含むことは確かである。また「憶」「念」「思」という用字から、歌群的なまとまりを見い出し、その意図を指摘することは重要である。しかし五〇一歌を逢い得ての思いと解する根拠として、歌の外の物語を仮定しないといけないという側面がある。なお同論文において、「憶」は、空間的・時間的に遥かなるものを思う時に使われると指摘されている。また二四一五歌の歌群は以下である。

物に寄せて思ひを陳ぶる

娘子らを袖布留山の瑞垣の久しき時ゆ思ひけり我は（11・二四一五）

ちはやぶる神の持たせる命をば誰がためにかも長く欲りせむ（11・二四一六）

石上布留の神杉神さぶる恋をも我はさらにするかも（11・二四一七）

いかならむ名に負ふ神に手向せば我が思ふ妹を夢にだに見む（11・二四一八）

二四一五歌の歌群においても、二四一五歌の状況を逢えているものであると解する根拠は薄い。

（三十四）『爾雅』には「瑞」の字は見られなかった。

（三十五）『大漢和辞典』「瑞」の説明。

（三十六）ともに『詩経』（新釈漢文大系）の語注。

（三十七）なお日本においても、神代紀下第九段一書第二の、高皇産霊命の大己貴神に対する、皇孫の地上の統治と大己貴神の幽界支配という告知を大己貴神が承服する場面において、大己貴神が「瑞八坂供瓊」を携える例が見られる。

（三十八）『時代別』には「うるふ」「うふほす」「うるほふ」は立項されているが、「みづみづし」は立項されていない。

（三十九）同書第一部第一章第三節一三一項にも「ミヅ」と「ミド」の交代について言及している。

（四十）『倭名類聚抄』伊勢十巻本「美豆加岐」、前田本、東京大学本も上声とする。

（四十一）佐竹氏は原文を引用する。「かの一六〇三年刊日葡辞書におけるミドリの語釈は、実に意外なほど、われわれのミドリについての知識から遠い。すなわち同書には Midori の訳を Raminhos nomos.l.gomos das aruores としているのである。さらに Midoriga tatçu という例文を挙げては Nacerem estes gomos.ou raminhos nouos.と解する。」

（四十二）「瑞歯」について、反正紀には「瑞井」で体を洗うという記事が続く。この「瑞井」は「他と区別される」井、もしくは漢籍における「瑞」のように、統治者のしるしとしての「瑞」と考えられる。その点からすれば、「瑞歯」もあるいは同じように捉えられる可能性も捨てきれず、後世の用例を含めた更なる検討が必要である。なお反正記には「瑞井」の記事は見えない。「水茎」は別語源で、「水」の方と関わるか。また「瑞玉盞」の歌謡において、大樹の枝を順番に詠んで行く方法は、「日代の宮」での雄略天皇の恩頼が国中に受け渡る様を示すと解され、その恩頼を「受けている」杯としての瑞玉盞と解される。

また、舒明紀七年秋七月条に「瑞蓮」が見え、「一茎に二花あり。」とされる。『新編全集』頭注に「めでたい蓮。一つの茎に二つの花が咲く。『宋書』符瑞志に「文帝元嘉十六年、華林池二双蓮同幹…又元嘉二十三年太子ノ西池二二蓮幹ヲ共ニス。」とされる。『大漢和辞典』にも瑞蓮は「めでたいはちす。」と説明される。

しかし「めでたい」という理解は、この災異続出の記事が「この種の記述は、書紀の述作者が『漢書』『後漢書』を参考にして、歴史事件の予兆や批判に用いようとしたのである。」（『新編全集』頭注）と解されることとの整合性に不審が残る。

また皇極紀三年六月条にも「剣池の蓮の中に、一茎に二萼ある者有り」とある。こちらは前後の文脈から独立した記事である。

更に天武紀八年十二月条に「亦、因幡国、瑞稲を貢れり。茎毎に枝有り。」とある。こちらの例は「是の年に、紀伊国伊刀郡、芝草を貢れり。其の状菌に似れり。茎の長さ一尺、其の笠二囲なり。」という記事に続く。芝草は「瑞草の一つで、服すれば不老延年の仙薬」（『新編全集』頭注）と考えられるので、「めでたき」と解すことは可能である。なお、「瑞蓮」は北野本や図書寮本に、「瑞稲」は兼右本にそれぞれ「アヤシキ」という訓が載る。

以上のように、「めでたい」という意味で「瑞」が使われている可能性は捨てきれないが、茎や枝が分かれている状態に「瑞」の字が使われているとも捉えることが出来る例として注意される。

（四十三）『万葉集古義』は「見は鏡の縁に云るなり」とする。

（四十四）三一一歌の恋の対象について、諸注多くは「鏡山」とする。それは『万葉集注釈』が指摘するように穏当な理解である。しかし一方で、『新編日本古典文学全集』に「別れ難い人を裏に秘めた内容かもしれない」と注をつけるように、恋人を想定する見方もある（『万葉集槻落葉』『万葉集私注』『万葉集全釈』など）。意味的に対立するものを導くという序の形式があると考える場合、「鏡山」を序と見る事で、後者の理解も可能になる。なお『万葉集私注』は「豊国の鏡山は見るに縁のあるものであるが、それにもかかわらず見ず久しくなつたならば恋しくあることであらう。」と訳す。

［主要参考文献］（ただし、私に字体を改めた箇所がある）
青木周平［ほか］編集（二〇〇一年）『万葉ことば事典』（大和書房）
井手至（一九七七年）「万葉集文学語の性格」（『万葉集研究』四号。ノチ『遊文録』万葉篇二、和泉書院、二〇〇九年）
井手至（一九七七年）「枕詞――序詞との関連において」（『国語国文』四十六巻五号。ノチ『遊文録』万葉篇二、和泉書院、二〇〇九年）
伊藤博（一九五三年）「万葉の修辞――二重の序について」（『国文学』（関西大学）十一号。ノチ『万葉集の表現と方法』下、塙書房、一九七五年）
伊藤博（一九九一年）「三思――柿本人麻呂の手法」（『万葉集研究』十八号。ノチ『万葉集の歌群と配列』下、塙書房、一九九〇年）
稲岡耕二（一九七二年）「人麻呂の枕詞について」（『万葉集研究』一号）
大久保正（一九五五年）「枕詞・序詞――回顧と展望――」（『解釈と鑑賞』二十巻六号）
澤瀉久孝（一九三七年）「枕詞を通して見たる人麻呂の独創性」上下、（『国語国文』七巻一号、二号。ノチ『万葉の作品と時代』岩波書店、一九四一年）
折口信夫（一九一九年）『万葉集辞典』（文会堂書店。ノチ折口信夫全集刊行会編『折口信夫全集』十一巻、中央公論社、一九九五年）
折口信夫（一九二九年A）「日本文章の発想法の起り」（『古代研究　国文学篇』大岡山書店。ノチ折口信夫全集刊行会編『折口信夫全集』一巻、中央公論社、一九九五年）
折口信夫（一九二九年B）「国文学の発生（第二稿）」（『古代研究　国

文学篇』大岡山書店。ノチ折口信夫全集刊行会編『折口信夫全集』一巻、中央公論社、一九九五年〕
甲斐睦朗〔一九七七年〕「形容詞「久し」の意義・用法――源氏物語の用例を中心に」〔『解釈と鑑賞』二十三巻九号〕
賀古明〔一九六一年〕「をとめらが袖ふる山のみづ垣」〔『上代文学』十一号〕
川端善明〔一九七八年〕『活用の研究』〔大修館書店〕
高志覚成〔一九四〇年〕「万葉集の枕詞に於ける様式性」〔『国語と国文学』十七巻十号〕
駒木敏〔一九八五年〕「序詞・枕詞」〔『国文学』（解釈と教材の研究）三十巻十三号〕
佐竹昭広〔一九五五年〕「古代日本語に於ける色名の性格」〔『国語国文』二十四巻六号。ノチ『万葉集抜書』岩波書店、二〇〇〇年（岩波現代文庫）〕
白井伊津子〔一九九三年〕「枕詞・被枕詞の関係分類の試み」〔稲岡耕二編『万葉集事典』学灯社。ノチ『古代和歌における修辞：枕詞・序詞攷』塙書房、二〇〇五年〕
土橋寛〔一九六〇年〕『古代歌謡論』〔新装版、三一書房、一九七一年〕
鉄野昌弘〔二〇〇〇年〕「袖振り」考――「石見相聞歌」を中心に」〔西宮一民編『上代語と表記』おうふう〕
橋本達雄〔一九五七年〕「記紀歌謡に現われた序詞の形態」〔『国文学研究』十六号。ノチ『万葉集を読みひらく』笠間書院、二〇一〇年〕
橋本達雄〔一九七五年〕「万葉集枕詞一覧」〔伊藤博〔ほか〕編『万葉集事典』有精堂〕
橋本達雄編〔二〇〇〇年〕『柿本人麻呂《全》』〔笠間書院〕
福井久蔵〔一九二七年〕『枕詞の研究と釈義』〔新装版新訂増補、有精堂、一九八七年〕
村田正博〔一九九五年〕「天地と長く久しく――旅人吉野讃歌の表現の一面」〔犬養孝博士米寿記念論集刊行委員会編『万葉の風土・文学：犬養孝博士米寿記念論集』塙書房〕
柳田国男〔一九二二年〕「うつぼ」と水の神」〔『史学』一巻四号、ノチ『定本柳田国男全集』五巻、筑摩書房、一九八〇年〕

〔使用テキスト〕（ただし、私に字体を改めた箇所がある）
『冠辞考』〔続群書類従完成会『賀茂真淵全集』第八巻、一九七七年〕
『玉篇』〔国字整理小組〔編〕、国立中央図書館〕
『源氏物語』〔阿部秋生〔ほか〕校注・訳、小学館、一九九四年（新編日本古典文学全集）〕
『口訳万葉集』〔折口信夫全集刊行会編纂『折口信夫全集』九、十巻、中央公論社、一九九五年〕
『五音三曲集』〔表章、加藤周一校注『世阿弥 禅竹』岩波書店、一九九五年（日本思想大系）〕
『古語拾遺』〔安田尚道、秋本吉徳校註、現代思潮社、一九七六年（新撰日本古典文庫）〕
『古事記』〔山口佳紀、神野志隆光校注・訳、小学館、一九九七年（新編日本古典文学全集）〕
『古事記伝』〔大野晋、大久保正編集校訂『本居宣長全集』第十一巻、筑摩書房、一九六八年〕
『史記』〔吉田賢抗著、明治書院、一九七三年（新釈漢文大系）〕
『詩経』〔芸文印書館、一九五五年（重栞宋本十三経注疏附校勘記）〕
（訓読は石川忠久『詩経』明治書院、一九九七年（新釈漢文大系）に拠る）

『時代別国語大辞典』上代編〔上代語辞典編修委員会編、第十刷、三省堂、一九九四年（初版は一九六七年）〕
『時代別国語大辞典』室町時代編〔室町時代語辞典編修委員会編、第三刷、三省堂、二〇〇二年（初版は一九八五年）〕
『周礼』〔芸文印書館、一九五五年（重栞宋本十三経注疏附校勘記）〕
（訓読は本田二郎『周礼通釈』秀英出版、一九七七年に拠る）
『新撰字鏡』〔京都大学文学部国語学国文学研究室編『新撰字鏡：天治本：附 享和本・群書類従本』増訂版、臨川書店、一九六七年〕
『説文』〔『説文解字注』上海古籍出版社、一九八一年〕（訓読は尾崎雄二郎編『訓読説文解字注』、東海大学出版会、一九八一年（東海大学古典叢書）に拠り、合せて訓点を付した）
『大漢和辞典』〔諸橋轍次著、修訂第二版、大修館書店、一九八九年〕
『篆隷万象名義』〔高山寺典籍文書綜合調査団編『高山寺資料叢書』第一巻、東京大学出版会、一九七七年〕
『枕詞燭明抄』〔佐々木信綱〔ほか〕共編『長流全集』上、朝日新聞社、一九二七年（『契沖全集』第十巻）〕
『万葉集』本文は、〔木下正俊校訂、CD-ROM 版、塙書房、二〇〇一年〕に拠る。
『万葉集』（新潮日本古典集成）〔青木生子〔ほか〕校注、新潮社、一九七六年〕
『万葉集』（新日本古典文学大系）〔佐竹昭広〔ほか〕校注、岩波書店、一九九九年〕
『万葉集』（新編日本古典文学全集）〔小島憲之〔ほか〕校注・訳、小学館、一九九四年〕
『万葉集古義』〔再版、国書刊行会、一九一二年〕
『万葉集釈注』〔伊藤博、集英社、一九九五年〕
『万葉集全釈』〔鴻巣盛廣、廣文堂、一九三〇年〕
『万葉集全注』〔有斐閣、一九八三年〕
『万葉集全註釈』〔武田祐吉、角川書店、一九五六年、増訂版（初版は一九四八年）〕
『万葉集総釈』〔楽浪書院、一九三五年〕
『万葉集註釈』〔佐々木信綱編『仙覚全集』古今書院、一九二六年（万葉集叢書）〕
『万葉集注釈』〔澤瀉久孝、中央公論社、一九八二年、普及版（初版は一九五七年）〕
『万葉集評釈』〔窪田空穂、角川書店、一九六六年（窪田空穂全集）（初版は一九四三年）〕
『万葉代匠記』〔築島裕〔ほか〕編集『契沖全集』、岩波書店、一九七三年〕
『（邦訳）日葡辞書』〔土井忠生ほか編訳、岩波書店、一九八〇年〕
『日本国語大辞典』〔日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部編、小学館、第二版、二〇〇〇年〕
『日本書紀』〔小島憲之〔ほか〕校注・訳小学館、一九九四年（新編日本古典文学全集）〕
『文選』〔上海古籍出版社、一九八六年（中国古典文学叢書）〕
『和名類聚抄』〔京都大学文学部国語学国文学研究室編『諸本集成倭名類聚抄』臨川書店、一九七一年〕

（よこうち　りょうた・本学大学院人間・環境学研究科博士後期課程）